

公益財団法人

偕行社名の継続を願う

小倉 健男 陸士61

偕行社会員諸君には言うまでもないが、偕行社は、明治維新直後の時期に、陸軍の中核をなす幹部を中心に、現職、OBの有志が作り上げ、社会的地位のある親陸組織である。

昭和20年、我が国は大東亜戦争に負けてアメリカに占領され、マッカーサーを中心とする連合軍が、日本の戦力を抹殺するための占領政策を実行し、憲法、教育制度、軍隊の解散等の屈辱に満ちた時代を過ごした。敗戦の衝撃と厭戦気分からこの政策を受け入れた影響はいまだに国民の各層、老若男女を問わず現在まで続いている。戦後再興された偕行社はこのような環境の下に、英霊に対する慰霊顕彰などを軸に運営されてきた。

我々61期は、戦後偕行社の会員になりたいと希望したが「貴様等は任官もしていないのだから資格はない」と断られた時期もあった。やがて会員の高齢化もあり、ようやく陸

軍士官学校在校生、幼年学校在校生も入会が認められた。入会が認められた時には本当にうれしかったものである。今や陸上自衛隊の元幹部も入会し彼らが偕行社の運営をしている。敗戦という社会の激変期を経験したにもかかわらず、偕行社はそのまま存続できたという歴史がある。

ここで疑問に思うのは、戦後陸上自衛隊が創設されてから70年以上になるのに、なぜ全国的な陸自の同窓会組織がなかったのだろうかということ。歴代の関係者はその必要を考えなかったのかよくわからない。偕行社が陸自会員を入れていたから必要を感じなかったのであろうか。

今春、陸修会という所謂同窓会的集りを作ったというが、そこまで行った議論や経緯について会員は全く知らされていない。『偕行』9・10月号で陸修会の立ち上げの記事があったが、なんと偕行社と一緒になるといふ。何とも急な話ではないか。さらには偕行社と陸修会と一緒にするのは偕行社の名前を変えるということを検討しているという。このような大事件は会員によく知らしめて何年かかけて大方の納得を得て決めていく話であろう。

また偕行社定款の修正であるが、今般の修正で評議員の定数を今までの50名から10名に激減させたことについて、その必然性について詳しい説明がなく、多数決で決めたことだから評議員もお願ひしますという感で通つて行つていいのだろうか。あまりにも官僚的、お役所仕事の思ふ。偕行社は会員の淨財で成り立つ同窓会的組織である。多くの会員の納得が原点であろう。陸修会と一緒になれば名前はともかくますます同窓会的になるだろうに。

最後にいくつか申し述べたい。

●戦後、国防婦人会が解散することになつて、残された多額の財産を偕行社に贈つた。この財産から得る利益を偕行社の運営に活用してきたが、果たして彼女たちの気持ちを十分受け止めてきたか。偕行社と一緒にいる陸修会会員は彼女たちの気持ちを受け止める覚悟と責任が求められる。

●賛助会員とは、談話室において、機会を見つけて意見交換したり談笑して仲良く交流してきた。偕行社はいわゆるアンテナショップ的役割を果たせる場所であり、自衛隊と市民を少しでもつなぐ役割を今後も続けたい。

●各地の偕行会は、それぞれ長い間の歴史を刻んできている。それが偕行社のもともとの姿である。偕行社も一地方である東京の偕行会だつた。したがつて今後の付き合ひ方として、堅苦しい関係は避けるべきだ。自由に相談できる関係が良い。

●今後、もし新しい名称を考えると、この事情が生じたときは、会員一人一人の意見を是非聴いてから動くことを願う。会員各々の思いを無視することがないようにされたい。

すでに現在の偕行社には、その歴史を踏まえて趣旨に賛同し会員になつてゐる陸自幹部OBが多数いて活躍している。これからも同窓会的な自由で闊達な意見交換ができる偕行社であつてほしい。いづれにせよ、これからは元自衛官の皆さんが偕行社を導いていく。よろしくお願ひしたい。